

令和2年9月吉日

英語科先生 各位

「第20回 田崎清忠杯 私立中学校英語レシテーション大会」
開催中止のお知らせ

拝啓

向秋の候、先生にはますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

平素は私ども一般社団法人教育支援協議会に格別のご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。また、新型コロナウイルスへの対応にご苦労されていることと存じます。

さて、令和2年11月8日(日)に開催を予定しておりました"第20回 田崎清忠杯 私立中学校英語レシテーション大会"は、本年度に限り新型コロナウイルス感染防止のため、中止と致しますことをご知らせします。

4月7日に緊急事態宣言が出て以来、9月頃までには終息の方向性が見えてくるのではないかと期待しておりましたが、今だ終息状況が見えない状況です。

実行委員会での幾度かの討議を経て、審査委員長田崎清忠先生ともご相談した結果、開催会場での「3密」対策の万全を期すことが難しいと言う結論に至りました。もう少し早めの中止決定もありましたが、討議し熟考した結果とご理解いただきたくお願い致します。

今年は開催20回目の節目の年でもありますので、今まで以上に盛り上がったレシテーション大会にするつもりでしたが残念です。

参加申込をいただいた学校様には、夏休みに「課題文」を暗誦に充てた学校様もいらっしゃるかと思います。別紙、田崎先生のメッセージに"この大会で発表するために覚えた英文は「強化された記憶」によって脳に焼き付き、それは英語力という財産になります。"と書かれているように、決して無駄では無いことを生徒にお伝えください。

来年もまた、笑顔の生徒たちにお会いできることを、審査委員・スタッフ一同しっかりと準備し楽しみに待っております。

最後に貴校の益々のご発展を祈念いたしております。

※田崎清忠先生から、別紙の「A MESSAGE TO THE PARTICIPANTS」をお寄せいただきました。

敬具

一般社団法人 教育支援協議会
代表理事 角川博信
私立中学校英語レシテーション大会
実行委員長 田中秀法



A MESSAGE TO THE PARTICIPANTS

審査委員長 田崎清忠

北海道小樽市の小樽運河。海に近いので、路上でその日の朝捕れた海産物を売っているおばあさんと話したことがあります。

「そばにラジオを置いて、ロシア語の語学番組を聴いているんですか」

「ええ。ウラジオストックからロシアのお客さんたちが船で来るので、ちょっとでも会話が出来るといいと思ってね」

「おえらいですね」

「なァにそうでもないさ。でも、ただ聴いているだけでも、家に大きな窓がひとつ増えたみたいで風通しがいいんだわ」

たしかに、日本語だけではなくて外国語を勉強すると物事の見方が「複眼的」になります。単に話せる・書けるという実用的な目的だけではなく、自分の国以外の国の人の習慣やものの考え方が分かるようになります。これが「国際人」への入口です。

もうひとつ。北海道と聞けば、本州の北にある島だと分かります。小樽がどこにあるか知っている人もいるでしょう。でも、「小樽運河」ということばで赤レンガ倉庫やガラス工房の様子を思い浮べる人は多くないかもしれません。これは何故でしょうか。「北海道」ということばは、天気予報などを通じて何度も耳にした結果いつのまにか覚えてしまいます。地理の授業などで「小樽」の位置を学んだ人がいるかもしれません。でも、「小樽運河」については現地に行った人でないと映像を結べないと思います。つまり、ことばとその実態が結びつく度合は、そのことばにどのくらい触れていたかという分量（「接触量」といいます）に比例するのです。

みなさんが英語暗誦大会に出場するためには、おそらく選んだ課題文を何度も何度も繰り返して、すらすら言えるようになるまで練習する筈です。これは「接触量」を増やして「記憶」しようと試みていることになります。一度記憶したものは、忘れないようにするために繰り返します。そして記憶のボックスに保存されたものを正確に取り出すためにも、繰り返しが大切です。この大会で発表するために覚えた英文は「強化された記憶」によって脳に焼き付き、それは英語力という財産になります。高校・大学と先に進んだときにも、ここで覚えた英語の単語や表現を記憶ボックスから取り出して使うことが出来るようになります。暗誦と記憶の関係は想像以上に大切な財産です。

今回はコロナの為に大会に出場できなくなり、とても残念です。でも、暗誦によって英語力を身につける努力は決して忘れないように。

